VIEW'S REPORT

鳥取県で「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」が開催

「故郷の未来はこの手で担う！」高校生が地方創生のアイデアについて討論

2015年12月、高校生が自らの目線で捉えた地方創生案について語り合う「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」が、鳥取県立鳥取中央育英高校で行われた。鳥取県、兵庫県、島根県から7つの高校の生徒が一堂に会し、自校がどのように地域を活性化させようとしているのか、その活動の過程で何を得たのかなどを発表・討論した。サミット当日の模様をレポートする。

地域を活性化させる活動の成果と課題を共有するために

鳥取県立鳥取中央育英高校（以下、鳥取中央育英高校）は、地域を支える人材の育成に力を入れ、地域への生徒の愛着を深められるように、地域の課題を考える活動を行っている。柱となるのは、2年生の「総合的な学習の時間」に取り組む「地域探究の時間」で、地域に関するテーマをグループごとに設け、地域の人との交流を通して解決策を探っている。

そこで、同様の活動を積極的に進めている同県や近隣県の高校から生徒を招き、各校が活動の進め方や成果、課題などを共有する「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」（以下、本サミット）を企画した（図1）。

開会のセレモニーを飾ったのは、鳥取中央育英高校2年生有志による郷土の伝統芸能「瀬戸獅子舞」だ。「地域探究の時間」に伝統芸能の継承者不足をテーマにしたグループが、地域の保存会の指導を受けながら練習してきた。その成果を発表することで、生徒の意欲をさらに伸ばすとともに、同校の取り組みを他校に紹介する機会にしようと、本サミットの冒頭で披露させることにした。

次に、同校の横山尚登校長が本サミット実行委員長として、故郷に対する関心や愛着を高校段階で高めていく必要があると訴えた。

続いて、同校の所在地である鳥取県中央部の町、北栄町の松本昭夫町

図1　「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」のプログラム

❶開会オープニング
- **郷土芸能「瀬戸獅子舞」披露：**
  鳥取県立鳥取中央育英高校2年生有志
- **サミット実行委員長挨拶：**
  鳥取県立鳥取中央育英高校　横山尚登校長
- **来賓挨拶：**北栄町　松本昭夫町長／
  鳥取県教育委員会　山本仁志教育長
- **主催校生徒会長挨拶：**
  鳥取県立鳥取中央育英高校2年　坂田育斗さん

❷サミット参加7校によるプレゼンテーション※発表順
鳥取県立鳥取中央育英高校／鳥取県立岩美高校／鳥取県立倉吉東高校／兵庫県立村岡高校／鳥取県立日野高校／鳥取県立智頭農林高校／島根県立隠岐島前高校

❸討論会「高校生が考える地域創造」
- **司会：**鳥取大学 大学教育支援機構
  教員養成センター　大谷直史准教授
- **オブザーバー：**島根県教育魅力化特命官　岩本 悠氏
- **パネリスト：**サミット参加7校の代表者各2～3人

❹振り返り
来場できなかった島根県立隠岐島前高校を除く、サミット参加6校の生徒全員と来場者による振り返り

＊「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」の資料を基に編集部で作成

＊プロフィールは2016年3月時点のものです

図2　プレゼンテーションでの各校の発表内容要旨（発表順）

◎鳥取県立鳥取中央育英高校　「地域探究の時間」での取り組みと、それを通して見えてきた地域の良さを発表。例えば、ブドウ農家への取材で、自校の所在地である北栄町は日照量が多く、土地の水はけが良いことなどを学んだ。今後は、特産品や自然環境の良さなどをPRする動画を作成し、ホームページなどで紹介してもらえるように自治体に働きかけていくことを考えている。

◎鳥取県立岩美高校　学校設定科目「ジオパーク（＊1）」での活動内容と成果を紹介。例えば、2014年度に行った山陰海岸ジオパーク（＊2）でのフィールドワークでは、地域にある美しい自然の魅力を県外の人に訴求するためのパンフレットを、鳥取環境大の研究者や大学生とともに製作した。また、2015年度に行ったインターンシップでは、地域産業への理解を深められた。

◎鳥取県立倉吉東高校　過疎問題について考察し、解決策を提案。過疎地域でインタビュー調査を行ったところ、「生活に不満を感じている」という人はどの年齢層でも2割に満たなかった。ただ、その一方で、人口流出によって人と人とのつながりが失われている様子が見て取れた。そこで、自分たちが主体的になって人とのつながりを再生させたいと、自治体とともに地域活動を企画・運営する組織「人輪委員会」を校内に設けようとしている。

◎兵庫県立村岡高校　地域活性化活動を紹介。例えば、注目してもらいたい場所や施設等を詳しく紹介するなど、自分の関心に応じて地図を作り直す「リマップ」活動に取り組む。1年生では、地域の古い町並みを見学することをテーマにした地図などを作製した。3年生では、人物、歴史、自然という3つのテーマごとに、映像を用いて地図を作り直し、地域の魅力を県内外に訴求しようとしている。

◎鳥取県立日野高校　地域活性化活動の内容を紹介。例えば、和歌山大学の学生とともに地域の農村に宿泊し、農業を体験したほか、農村の経済状況や今後の見通しなどについてインタビュー調査を行った。また、地域の養蜂家の協力を得て校内で蜜蜂を飼育しており、蜂蜜も自分たちで採取。それを用いたドーナツを、地域の業者に依頼して商品化した。地域資源の有効活用になると期待している。

◎鳥取県立智頭農林高校　地域と連携して取り組む授業の内容を紹介。伝統的な農業と景観を保全しようと取り組んでいる棚田の補修活動では、田植えや草刈りも行っている。また、江戸時代に栄えた宿場町・智頭宿の景観を復元するために、地域の人たちの指導の下、格子戸作りに取り組み、地域の老舗の商店や旅館などに納品している。

◎島根県立隠岐島前高校　浜辺のゴミを拾う活動を紹介。拾ったゴミを分類すると、地元から出たと思われるゴミが約7割を占めた。そこで、自分たちが地域の小・中学校で所定の場所にゴミを捨てる習慣を定着させるなどの啓発授業を行う。まずは子どもに働きかけることで、次第に大人の意識も変わり、少しずつだが着実にゴミを減らせると期待している。

長、同県教育委員会の山本仁志教育長が登壇。本サミットに対する期待を語った。松本町長は、同町が同校と連携して地域活性化に取り組んでいることを述べ、若者の柔軟な発想が地方創生の鍵になると強調した。山本教育長は、他校の取り組みの工夫を知ることで、気づきが何倍にもなると話し、今後も活動を継続していってほしいと呼びかけた。

多彩な試みを通して地域の魅力を発信

本サミットには、2つの主要なイベントがある。

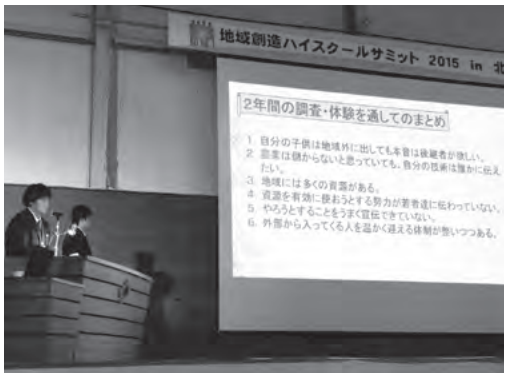

写真1　プレゼンテーションでは、代表グループが1校ずつ登壇し、スライドを用いて自校の取り組み内容を発表。

その1つめは、サミットに参加した7校によるプレゼンテーションで、各校の代表グループが、地域の発展を目指して取り組んでいる活動について発表した（**図2・写真1**）。参加校の1つ、島根県立隠岐島前高校（以下、隠岐島前高校）は、悪天候の影響で来場できなかったため、インターネットのテレビ電話機能を用いてプレゼンテーションを行った。

どの高校も、地域の魅力を発信する多彩な試みを紹介した。例えば、地域の自然の美しさをまとめたパンフレットを作り、観光客の増加につなげようとする鳥取県立岩美高校、江戸時代に用いられた格子戸を作り、古くから地元にある商店などに納品している鳥取県立智頭農林高校（以下、智頭農林高校）、自校で飼育する蜜蜂から蜂蜜を採取し、その蜂蜜を用いたドーナツを商品化している鳥取県立日野高校といった具合だ。アイデアをただ出すだけでなく、それを実践している高校が多いのは、高校生が真剣に地域の課題と向き合っていることの表れと言えるだろう。

また、取り組みを通して、素晴らしい文化や産業が身近にあることに

＊1　美しい地質や貴重な地質を保護するとともに、教育などに生かすことを目的にした自然公園。
＊2　京都府、兵庫県、鳥取県にまたがる、面積2458.44㎢のジオパーク。リアス式海岸などを観察できる。

気づいたという声も、多くの高校の発表で聞かれた。

論理的に意見を述べ堂々と議論する生徒たち

本サミットの2つめの主要イベントは、討論会だ。7校の代表者各2～3人に、司会として鳥取大学大学教育支援機構教員養成センターの大谷直史准教授、オブザーバーとして島根県教育魅力化特命官の岩本悠氏が加わり、「高校生が考える地域創造」というテーマで話し合った（図3）。

本サミットに対する感想や、地域の課題に向き合って得られたことを、どの生徒も具体的に挙げたほか、生徒同士が取り組みに関する質疑応答を活発に行った。例えば、智頭農林高校の格子戸作りに対しては、鳥取県立倉吉東高校の生徒が「地域貢献にどのように結びつくのか」と問いかけた。それに対し、智頭農林高校の生徒は「格子戸を設置した家屋を増やし、江戸時代の宿場町の面影を再現することで、観光地としての魅力を高めたい。そうなれば観光客が増え、地域活性化につながると考えている」と答えた。地域の課題に向き合って得られたことの1つとして、多くの生徒が「自分の意見を伝える力を身につけられたこと」を挙げていたが、それは、実際に質疑応答で論理的に考えを述べ合う生徒の姿に、はっきり表れていたと言える。

さらに、他校の活動に対する提案も行われた。例えば、鳥取中央育英高校のプレゼンテーションでは、研究機関の調査データを用い、鳥取県の住民の幸福度に言及していた。それについて兵庫県立村岡高校の生徒は、「地域の人の幸福度を独自に調べると、面白いのではないか」と勧めた。

また、討論会の途中には、鳥取県の平井伸治知事が来場し、「高校生一人ひとりが、地域の未来を変える力を秘めている」と、生徒を激励する一幕もあった。本サミットに寄せる同県の期待の大きさがうかがえる。

図3　討論会で多くの高校生から出された意見（抜粋）

本サミットに参加した感想

- 他校の実践を知り、自校の取り組みをより良くする参考になった。
  - 鳥取県立日野高校が、取り組みの中で試作したドーナツを、地域の協力を得て商品化していることに刺激を受けた。自分たちも、地域の農園で栽培したイチゴを用いたタルトを校内で作っているが、それも商品化させたい（鳥取県立岩美高校）。
  - 「子どもの行動を通して大人を変える」という島根県立隠岐島前高校の姿勢に勇気をもらった。自分たちもそうした気持ちで取り組んでいきたい（兵庫県立村岡高校）。
  - インタビュー調査を通して幅広い年齢層の意見を聞くという鳥取県立倉吉東高校の手法を、今後は自分たちの取り組みにも取り入れていきたい（鳥取県立鳥取中央育英高校）。　など

地域の課題に向き合って得られたこと

- 地域に対する見方が変わった。取り組みを始める前は「何もない不便な所」という印象だったが、取り組むうちに、名所や古跡があること、豊かな自然があることなどに改めて気づき、地域を誇りに思い、自分の手で発展させたいという気持ちが生まれた。
- 生徒同士はもちろん、地域の人たちとも意見交換を重ねることで、自分の視野が広がったと実感している。
- 地域の人や企業の人といった学校外の大人と交流することで、自分の意見を整理し、分かりやすく伝える力が身についた。
- 行動して初めて見えてくるものがあることや、先入観ではなく、自分の体験によって物事を判断することの重要性を学んだ。
- チーム内で力を合わせれば、1人ではできないような大きなことが実現できると身をもって感じた。　など

サミットで何を得たのかを生徒が来場者とともに検討

討論会の後には、本サミットの振り返りが行われた（写真2）。それは、当日に得た気づきを、今後の活動にしっかり生かせるようにするためだ。

岩本氏の司会により、隠岐島前高校の生徒を除く、会場にいる生徒全員と来場者がグループになり、①本サミットで学んだこと、②本サミットの課題、③課題の改善策を話し合った。①については、「地域活性化についての様々な取り組みが分かったこ

写真2　振り返りでは、生徒が自分から来場者に声をかけてグループをつくり、積極的に自分の考えを述べていた。

と」、②については、「プレゼンテーションも討論会も、テーマが広くなりすぎ、論点がややぼやけてしまったこと」、③については、「テーマをもっと絞ること」など、様々な意見が挙げられた。岩本氏は、地域活性化に不可欠な要素として、主体的な行動力、課題発見・解決力、コミュニケーション能力の3つを挙げ、それらを伸ばすためには、多様な人たちとの交流が重要だと強調。交流の輪を他地域に広げることで、さらに学びを豊かにしてほしいと訴えた。

最後に、討論会に参加した生徒が、討論の内容を踏まえて作成した本サミットの「共同アピール」を発表した。それは3つの宣言から成り、「私たちは、高校生の視点から地域と連携して地域の現状や課題を探究し、地域創造のために提言していきます」「私たちは、『地域創造ハイスクールサミット』を今後も協力して開催し、意見交換していきます」「私たちは、地域創造の志を共有する仲間を全国に求めていきます」と、決意を力強く述べていた。今後も、「地域創造ハイスクールサミット」の進展を注視していきたい。

高校生が地域の課題に取り組む意義

～「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」を終えて～

今後は生徒が主体となって開催していってほしい

鳥取県立鳥取中央育英高校
校長
横山尚登
よこやま・ひさと
教職歴37年。同校に赴任して2年目。

故郷は、誰にとってもかけがえのないものです。ただ、あまりにも身近な存在であるためか、その良さに気づきにくい面があります。都市部の華やかさに憧れやすい地方の子どもであれば、なおさらです。また、地方の高校では、多くの生徒を都市部の大学などに送り出しますから、高校段階で生徒を故郷としっかり向き合わせてこそ、地域を担う人材が育てられると、私は考えています。

そこで、本校に赴任した14年度に、地域と連携しながら、地域について探究し、考える取り組みを始めました。地方には、少子高齢化や過疎化など、容易には解決策が見いだせない課題が山積しています。それは、どの生徒も探究活動を通して実感するでしょう。ニュースなどで漠然と知っていた社会問題が、自分の生まれ育った地域で実際に進行していることを知れば、「自分たちの手で何とかしよう」という意欲につながると考えました。

2年生に「地域探究の時間」を設けるなど、取り組みが本格化した15年度には、他校との意見交換の場をつくりたいと思うようになりました。地域と連携した取り組みを介し、地域に貢献しようとしている高校は、全国にたくさんありますが、特殊な環境での事例も少なくありません。全国で取り組みの成果と課題を共有し、一般化することこそ、地方創生への大きな一歩となるでしょう。それが、本サミットを本校が主催した理由です。前例があまりない取り組みなので、手探りで準備を進めてきました。先生方が、他校の活動の視察などを積極的に行ってくれたからこそ、実現できたと思います。

本サミットの討論会では、他校の取り組みから刺激を受けたという声が、参加校の多くの生徒から聞かれました。今回得た気づきを基に、生徒が主体的に工夫すれば、各校の活動はもっと充実していくでしょう。そのため、本サミットを継続していく意義は大きいと思います。最後に発表された3つの宣言にあったように、今後は生徒が主体となって、進んで計画し、運営していってほしいと考えています。

生徒が自分の気づきを後輩に引き継げるように

鳥取県立鳥取中央育英高校
企画研修部主任
田中暁宏
たなか・あきひろ
教職歴21年。同校に赴任して5年目。

本校の15年度の「地域探究の時間」では、2年生が郷土芸能や福祉などの25のテーマについて、地域の人と交流しながら課題を見つけ、解決策を探りました。その過程で、自分で考えることの面白さにどの生徒も気づき、知的好奇心を高めていったようです。そのため、教科学習の意欲向上にもつながりました。

知らない人に対してでも堂々と自分の意見が言えるようになったことは、取り組みの大きな成果です。それは、「地域探究の時間」の集大成と位置づけていた本サミットでも、発揮されたと思います。

ただ、地域を活性化させるには、アイデアをもっと実践に移し、現実的な提案をしていく必要があります。そのため、教師間はもちろん、生徒間でも、自分たちの気づきや学びを下の学年にしっかり引き継ぎ、取り組みをさらに発展させていきたいと考えています。

＊プロフィールは2016年3月時点のものです